

本特集がテーマとして取り上げるエチェベリア (Luis Echeverría Alvarez) 政権は、1970年12月から6年間、メキシコに存立した政権である。なぜ今、エチェベリア政権を取り上げるのか。また、表題にある現代メキシコの政治・経済危機とは何なのか。特集にあたって、この2つの点を明らかにすることで、以下に続く3つの論文をよりよく理解するための一助としたい。

3つの論文は、共に次の2つの事情を前提として書かれている。ひとつはPRI体制と呼ばれるメキシコ独自の政治体制であり、もうひとつは1982年以降のその動揺である。

メキシコは、政変が相次ぐラテンアメリカ諸国の中では例外的に、政治が安定した国といわれてきた。そのような政治的安定が可能となったのは、多分に、PRI体制と呼ばれる制度的革命党 (Partido Revolucionario Institucional。略称 PRI) による一党支配体制によるところが大きい。PRIは1929年の結党から今日に至るまで、メキシコの政治を支配してきた。PRIは労働者、農民、中間層を支持基盤とする大衆政党である。党組織は労働部会、農民部会、さらに、中間層を統括する一般部会の3部会から構成され、各部会の傘下にはそれぞれ、メキシコの主要な労働組合、農民組合、公務員組合等が統合されている。選挙ともなればこの党組織が集票マシンとして機能し、PRI候補は圧倒的多数で当選を果たすのが常であった。組織的にPRIから排除されてきた唯一の階級は、資本家階級であった。大衆層を傘下に取り込んだ党組織は、建前的には大衆の要求を政治に反映させるチャンネルとして機能するとされたが、現実には、大統領と、党総裁と3つの部会の代表から構成される党幹部会等からなる少数の有力者が牛耳る、上意下達のチャンネルとして機能してきた。大衆の支持を取りつけるための主要な手段は「アメ」と「ムチ」である。「アメ」とは、具体的には労働条件の改善、農地の分配、補助金の支給、地位や特権の供与、等々である。一方、近年における「ムチ」の最も代表的な事例は、1968年に盛り上がった学生運動に対する政府の武力弾圧であった。

半世紀以上にわたりメキシコの政治的安定の要となってきたPRI体制であるが、1982年以降は、それが動揺を来しつつある。そのことを端的に示すのが、1988年の大統領選挙におけるPRI候補サリナス (Carlos Salinas de Gortari) の苦戦であった。サリナスは50歳

ぎりぎりというかつてない低得票率で当選したのである。もうひとつの象徴的な事件は、1989年に史上初めてメキシコ北部のパハ・カリフォルニア州で野党の国民行動党 (Partido Acción Nacional : PAN) 候補が州知事に当選したことである。PRI の絶対的支配の壁の一角が崩れたといえる。このような事態が生じた要因としては、ふたつのものを指摘することができる。ひとつは1982年の対外債務累積問題の発生を契機とする経済危機とその後の経済の再編である。多額の対外債務、財政赤字を抱えた政府には、大衆に「アメ」をわけ与える余裕はなくなった。それどころか、IMF の指導の下に導入された経済再建政策は、賃上げの抑制、補助金の削減、公企業の統廃合・民営化、公務員の削減等によって、大衆に多大の負担を強いるものであった。それらが大衆の PRI 離れを促した。一方、経済危機下に実施された民間銀行の国有化は資本家階級の反政府感情を刺激し、彼らの PAN への肩入れを促すこととなった。以上は、PRI 体制動揺の直接的契機ともいえるものであるが、もうひとつ、要因として指摘したいのは、PRI 体制が1982年以前にすでに行き詰まりの状態にあったという点である。そのことは、たとえば政権内部の腐敗、PRI ないしは PRI 傘下の労働組合から独立した労働組合運動の台頭、農民による土地占拠の発生、資本家階級の政治活動の活発化等の現象から窺い知ることができる。PRI 体制行き詰まりの危機は、政府＝PRI 自身も認識するものであり、1980年代後半以降、体制再編の努力が積み重ねられてきた。たとえばメキシコの労働組合の中でも最強といわれる国营石油公社労組から腐敗幹部を追放したこと、農地改革の成果であるエヒード制度を有名無実化するといわれる憲法改正を実施したこと、さらに上述のように PAN の州知事の就任を容認したことも、政府＝PRI の体制再編の試みの一環として理解することができる。

本特集の表題にある現代メキシコの政治・経済危機とは、以上のべたような、1982年の対外債務累積問題の発生を契機として顕在化した、長期的趨勢としての PRI 体制の行き詰まりと、PRI 体制を支え同時に PRI 体制によって支えられてきた経済発展の行き詰まりを指す。

ところでこのようなメキシコの政治・経済危機がいつ頃から始まったかについては、エチェベリア政権期を指摘する点で、3つの論文の筆者は一致している。それは上記にあげた体制行き詰まりの兆候ともいえる現象が、いずれもエチェベリア政権期に顕著となるためである。エチェベリア政権期に一体何が起きたのか、それが現代メキシコの政治・経済危機とどう関わっているのか。そのことを明らかにすることは、今後のメキシコの政治・経済の再編の行方を考える上できわめて重要である。このような理由から、本特集はエチ

エベリア政権を取り上げるのである。

ここで3つの論文の特徴について述べておきたい。3つの論文は次のような共通の特徴をもつ。それは、エチェベリア政権期の諸社会階級の動向に注目し、3論文がそれぞれ異なった社会階級のひとつを取り上げ、その具体的な動きとそれに対する政府の対応を検討し、さらにそのことと現代の政治・経済危機との関連を考察していることである。取り上げた階級は、資本家、労働者、農民である。このように異なった階級の視点からエチェベリア政権に接近することにより、特集全体では総体としてのエチェベリア政権の意義をかなり浮き彫りにすることができたと考える。

最後に各論文の内容について簡単にふれておこう。

星野論文「エチェベリア政権期における財界と政府の関係——協調関係の破綻とその要因——」は、近年の財界人の政治活動の活発化は、エチェベリア政権期の政府との関係悪化を契機とするという認識のもとに、同政権期の財界・政府関係の悪化の経緯と、その要因を経済面に限定しながら検討している。ここで関係悪化の主要な要因として指摘されているのは、戦後のメキシコのめざましい経済発展を支えた諸条件の変化とそれによる発展の行き詰まりである。

佐藤論文「エチェベリア政権期における労働組合運動の再編」は、エチェベリア政権期における労働組合運動の変化が、1980年代以降の政府系労働組合運動の再編過程の端緒であるとの認識のもとに、同政権期における変化を独立派労働組合運動の活動を軸に明らかにしている。さらに、政府の労働組合に対する「開放政策」の意図を検討することによって、同政権期における変化と1980年代以降の再編との関連を明らかにしている。

畑論文「エチェベリア政権下の農地改革」は、農民を重要な支持基盤とするPRI一党支配体制が、農業と農地改革の停滞により正統性の危機に直面しているとの認識のもとに、エチェベリア政権の農地・農業政策を正統性回復の試みと位置づけ、その内容と意義、さらに政策に対する農民の反応を検討している。エヒード制度を有名無実化する最近の憲法改正が、エチェベリア政権の農業政策の延長線上にあることが明らかにされる。

なお本特集は、平成3(1991)年度に実施した「エチェベリア政権(1970-76年)と現代メキシコの政治・経済『危機』」研究会(主査 星野妙子)の成果の一部である。

(アジア経済研究所地域研究部)